

<実践報告>

## ライフヒストリーを読み解く多文化教育の実践

徳井厚子 信州大学学術研究院教育学系

### Developing Multicultural Awareness through Reading Life History

TOKUI Atsuko: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	ライフヒストリーを題材に多文化教育の実践を行いその実践の効果 を明らかにすること.
キーワード	多文化教育 ライフヒストリー ふりかえり
実践の目的	ライフヒストリーを用いた多文化教育の実践
実践者名	著者と同じ
対象者	信州大学教育学部 (50名)
実践期間	2018年11月
実践研究の 方法と経過	<p>(1) 第二次世界大戦の時代を生きた8名の日系アメリカ人のインタビュー記事(ライフヒストリー)資料(森茂・中山 2008)のうち、ひとり1名のライフヒストリーを選び、読む.</p> <p>(2) 当事者の立場に立ち、アイデンティティという観点から考察する.</p> <p>(3) 異なったライフヒストリーを担当した8名1組のグループになり担当したそれぞれのライフヒストリーを紹介し、(2)を共有する.</p>
実践から 得られた 知見・提言	<p>○ライフヒストリーを授業で扱う意義として、歴史的事実の学びだけではなく、実在した一人の人間の生き方を通して当事者の立場から学ぶことができる.</p> <p>○認知的なレベルだけではなく感情的なレベルでの学びが可能である.</p> <p>○語られた言葉を通して学ぶことにより、生き方、語り方からその人の人生について学ぶことができる.</p> <p>○二項対立的なアイデンティティだけではなく、重層的、ハイブリッドなアイデンティティへの気づきを促すことが可能となる.</p>

## 1. はじめに

現在、世界的なレベルで人々が移動し、ますます多文化化が進みつつある。法務省によれば、2018年末の日本国内の在留外国人の数は273万1093人と過去最高となっている。

(法務省ホームページ)。また外国人労働者の受け入れ拡大に向けた出入国管理法の改正案が2018年に成立し、今後ますます人々の移動が増加することが予想される。また、2019年6月には日本語教育の推進に関わる法律が成立した。総務省(2006)は、「多文化共生」について「国籍や民族の異なる人々が互いの文化的違いを認め合い対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としている。

こうした中、教育現場も今後多文化化していくことが予想される。教員養成課程において多文化教育を行うことは、重要な課題の一つとして考える。

本報告では、「多文化教育方法論」の授業で行ったライフストーリーを「アイデンティティ」という観点から読み解く実践の報告を行い、受講者のふりかえりから多文化教育の中でライフヒストリーを授業で扱うことの異議を考察する。

## 2. ライフヒストリーを授業で扱うことの意味

今回の実践では、ライフヒストリーを用いるが、これは実在する人々によって「語られた」言葉を通し学ぶという学習である。森茂・中山(2008)は、ライフヒストリーを用いる実践について以下のように述べている。

オーラルヒストリーによって語られる「生きている歴史」は子どもたちを魅了する。そこには、語る人柄、その人の個人的背景、そして顔と声がある。過去を語りながら今があり、今があるから過去を物語るができる時間の流れが、その人の生きた分だけあり、その時間の長さは子どもにも感覚的に理解できる長さである。(森茂・中山 2008)

ライフヒストリーは、多文化教育における一つの実践方法であるが、個人の生き方に焦点を当てることで単なる歴史的事実を学ぶのとは異なった学びが可能となる。日系人の歴史をテーマにした授業の場合、日系人を取り巻く歴史的背景や制度などマクロな側面を学ぶことも必要といえるが、それだけでは当時の人々がどのように生きていたのかということまでは理解できないのではないかと考える。ライフヒストリーを通し日系人のミクロな個人レベルの側面から、当事者(日系人)たちが当時どのように生き、あるいはどのように生きようとしていたのかということについて学んでいくことも重要であるといえよう。

本実践では、第二次世界大戦の時代を生きた8名の日系アメリカ人のインタビュー資料(森茂・中山 2008)を題材とし、当事者によって紡がれた言葉をハイブリッドなアイデンティティという観点から読み解き共有した。戦争という時代の中で2つの国の狭間で生きる日系人がどのような人生を歩んだのか、その中でアイデンティティの在り方はどのようなだったのかについてライフヒストリーを通して当事者に共感しながら学ぶというのが

目的である。

### 3. 授業及び実践の概要

当実践は、「多文化教育方法論」の授業の一部で行ったものである。授業の内容は以下の通りである。

日本の国内における内なる国際化に焦点をあて、歴史的、社会制度的な側面にも焦点をあてながら学ぶとともに、学校教育における実践方法についても学んでいく。

授業の内容は、多言語サービス、在日韓国人の歴史、アイヌの歴史と現在の課題、日系人歴史とライフヒストリー等である。授業全体のまとめとして、多文化教育の実践のための指導案を作成し、発表を行う。なお、毎回の授業後にはふりかえりシートを提出する。

今回報告を行う「ライフヒストリーを読み解く多文化教育の実践」は、日系ブラジル人の歴史について学んだ後で行ったものである。

実践の概要は、以下の通りである。

(1) 第二次世界大戦の時代を生きた8名の日系アメリカ人のインタビュー記事（ライフヒストリー）資料（森茂・中山 2008）のうち、ひとり1名のライフヒストリーを選び、読む。

(2) 当事者の立場に立ち、アイデンティティという観点から考察する。

(3) 異なったライフヒストリーを担当した8名1組のグループになり、担当したそれぞれのライフヒストリーを紹介し、(2)を共有する。

以下では、当実践で扱ったライフヒストリーの一例（森茂・中山 2008）の概略である。

Eさんは、第二次大戦の時に、アメリカ軍に所属した。兄は日本軍、長男はアメリカ軍、次男は日本海軍に所属していた。本人は日系人という理由からスパイ扱いされた経験もあった。戦後兄に会うときには辛かった。しかし、胸の内を語り合い兄と弟に戻れたという。「戦争で勝つ人は誰もいない。皆が何かを失う」と言う。「アメリカ人であることは、名前ではなく心の問題」と言う（森茂・中山 2008をもとに筆者が要約）。

### 4. 実践のふりかえりからみえてくるもの

ライフヒストリーを用いた実践を通して学生たちはどのような学びがあったのだろうか。ここでは、実践直後のふりかえり及び授業全体のふりかえりから、どのような学びがあったのかについてみていきたい。

#### 4.1 実践直後のふりかえりから

実践直後のふりかえりは、アイデンティティの葛藤や複雑さ、ハイブリッドなアイデンティティに関する記述が見られた。

(1) ハイブリッドなアイデンティティ、アイデンティティの葛藤について

ア 自分はいったい何者かという問いに苦しんでいたのではないか。

イ 自分のルールを大切にしながら自分はアメリカ人という自覚もある。

ウ 日本とアメリカの狭間にいた人はより苦しみが強かったと思う。それは、本来なら一番の理解者であり応援してくれるであろう家族との信じるところが異なっている点にあると考える。

エ 純粹に「〇〇人」と断定できないあやふやな立ち位置がもたらす影響について考える必要がある。

オ Hさんは戦後アメリカに戻る決断を出していますが、自分の生きる道を苦しんだ末に選んだと思うととても難しい選択だったと思います。アイデンティティの問題とも深く結びついていると感じました。

これらは、具体的な場面や当事者について共感しながらハイブリッドなアイデンティティやアイデンティティの葛藤について記述されている。

### (2) アイデンティティの葛藤についての心理的な側面

カ アメリカ人なのか日本人なのか自分がどのような感情でいたらよいかわからない。

キ 信仰がずっと仏教から変わらなかったことから、「日本人である」という気持ちはありながらもアメリカ軍として戦う道を選んだと思う。心理的葛藤が多くありそう。

これらは、アイデンティティの葛藤について特に心理的な部分に焦点をあてた記述である。

### (3) アイデンティティの変容について

ク Tさんは、日本人の要素を内面化している面もあった一方で、アメリカ人としての要素の方をより内面化していった。

この記述は、アイデンティティがどのように変容していったかについて焦点をあてた記述である。

また、以下のようにアイデンティティの複雑さについて述べられた者も見られた。以下のケでは、ライフヒストリーの文章のみで学ぶことの限界について述べられている。

ケ 「複雑」という文字通りに今の自分の立場を心の中で思うとうまく整理がつかなかったと思う。そのため立場上アメリカ軍の立場が強いのではないかと感じるところがあるが、日本人のような行動をおさえたり、多くの悩みや疑問も少なからずあったのでは？しかし、私自身の考えでは考えられないような思いが絶対にあると思う。文章だけでは語られない思いが。

## 4.2 授業全体の感想から

授業全体のふりかえりの中で、ライフヒストリーを扱った授業について記述されていた部分を述べる。

授業全体のふりかえりは自由記述式で行っているが、これらをカテゴリー化したところ、アイデンティティ、当事者への共感、ライフヒストリーという実践方法についての記述が見られた。授業直後のふりかえりがアイデンティティについての記述が多かったのに対し

て、授業全体のふりかえりからは、当事者への共感や授業の実践方法など多岐にわたった視点からふりかえっている様子が読み取れる。以下はふりかえりの記述である。

### (1) アイデンティティ

コ 自分は何人なのであろうという葛藤が印象的だった。

サ アイデンティティのぶれが多いと思った。血も生まれも名前も統一されていなかったら「自分は何者か」といいたくもなると思った。

シ あまり国で区別される人がいなくて新鮮だった。しかし、日本でも日本人っぽくないこともあり、国の区別は意外と曖昧だと思った。

ス 国籍、アイデンティティ、自分らしく〇〇人って何だろうということを考えさせられました。

セ 日系人という大きな枠組みだけではなく個人というミクロの視点から日系人を見ることで、アメリカと日本という2つの国の間でアイデンティティが揺らぎながらも両国の架け橋になろうとした存在がいたことがわかった。

アイデンティティの葛藤についての記述だけではなく、「アイデンティティとは何か」といった問い直しや、ミクロな視点で学んでいくことの重要性に結びけるなど客観的に授業の視点について捉えた記述が見られた。

### (2) 共感

ソ 日本語が禁止された生活はつらかったのではないか。

タ 両親が違う文化圏の人同士だからこそその苦悩を知って辛いなと思った。彼らなりに自分の中で答えを見つけていって強いなと思った。

チ もし自分がこの時代に生きていたらと考える機会ができた。

ツ 一人ひとりのライフヒストリーに特化することでその人の気持ちになってみるのができた。

テ 貧困を脱却したいという気持ちも実際はそうではなく、生活が苦しいながらも頑張る姿が感じられた。

ト 私はHさんの話を最初に読んだ。二世の人の大変さを学べたことは興味深かった。他の人も様々な人生や思いを持って生きてきたことを知れたのでよかった。

ナ 当事者の話から、日系人の苦悩や願いについて学び取ることができました。

ニ 戦時中にハワイにいた人(日系人)がどんな気持ちでいたのか知る機会は貴重だと思った。

ヌ 同じ日本人でもいろいろな人生があったり日系人ではないとわからない苦しみを学ぶことができた。

これらの記述は、ライフストーリーを通して当事者の気持ちに共感したという内容である。例えばライフストーリーを通じて当事者の苦しみだけではなく願いや強さを感じたという記述が見られた。こうした共感に関する記述は、実践直後のふりかえりにはほとんど見られなかったが、授業後のふりかえりに多く見られた。授業全体のふりかえりの中でラ

イフヒストリーの語り手に共感するという学びについて意識したのではないかと考えられる。

### (3) 日系人の多様性

ネ 日系人の中にもいろいろな立場の人がいると知り、とても勉強になった。

ノ 日系人とひとくりにいっても、それぞれ価値観、考え方が全く違うなあとびっくりした。日系人という括りではなく、一人の人として相手と関わっていきたいと思った。

ハ 様々な立場の日系人について触れることができてよかった。

ヒ 日系人自身の思いもそれぞれ違うことがわかった。

フ 日系人の中でも日本を憎んでいるまたはアメリカを憎んでいる、そして日本またはアメリカが好きなど多種多様な考えを持っている者が多くいると感じた。

ヘ 一口に「日本人」といっても実に広範囲にわたるもの。世界は広く血も生まれも日本人の私たちの中での差異など微々たるものだと思った。

ホ いろいろな人生があり人によって考え方は違うのだと感じた。

マ 様々なライフストーリーがあることを知った。悲しい現実もすべて受け入れなければならないと感じた。

ミ 日系人とひとことで言ってもたくさんの人がいてそれぞれの生き方があって日系人であることをよく思う、嫌だと思ふのは人の捉え方次第なのかなと思った。

ム 周囲の状況や思想によって日系人一人ひとりの人生が大きく異なっていると感じた。日系人の捉えかたが変化した。

メ ライフストーリーからその人の全てを理解することは容易ではありませんが、様々なケースの日系人の方がいて、いろいろな考え、経験をもっているんだなととても学びになりました。

日系人の多様性については実践直後にはほとんど見られなかったが、授業後のふりかえりシートに多く見られた。これらの記述から、日系人がひとくりにできないこと、日系人の心情の多様性、一人ひとりのライフストーリーの多様性について言及したものが見られた。

### (4) 実践の方法

モ ライフストーリーという授業法がおもしろいと思った。

ヤ 歴史を違った視点から見ることができる。授業に活かしたい。

ユ 生の声を読むことで、当事者の思いや捉え方に少し触れられてよかった。

ヨ 「誰か」という漠然とした話ではなく、一人一人の人生を見ることで身近に感じたとし、その当時の生の声を感じ取ることができた。

ラ 言葉の共有に終わるのではなく実際に一人ひとりについてもっと詳しく知りたかったです。

リ この活動は初めてだったので記憶に残っている。小中学生の社会科の授業などでも活用できそうなので、とても勉強になったし、単純に楽しかった。

ル 身近にいないので、直接聞けない生き方や想いを知ることができ印象的だった。

レ ライフヒストリーを扱った際の学習形態がはじめてだったので、非常に面白かった。

ロ 自分が役になりきることでその人の気持ちを深く考えることができた。

ライフヒストリーという形態を用いることによって当事者に寄り添うことができたという記述や、学校教育の中で活用したいという記述が見られた。また、より詳しく生き方について知りたかったという記述も見られた。

これらの他「自分のライフヒストリーについて考えなくなった」のように自分自身のライフヒストリーへの関心を示す記述も見られた。

## 5. まとめ

以上、ライフヒストリーを用いた多文化教育の実践について報告した。2つのふりかえりから、ライフヒストリーを用いた実践にはどのような意義が見いだせるであろうか。以下では今回の実践から見いだした4点について述べる。

<1> 歴史的事実の学びだけではなく、実在した一人の人間の生き方を通して当事者の立場から学ぶことができる

まず、ライフヒストリーは歴史の学習とは異なり、実在した一人の人間の生き方を通した学びであるという点である。ふりかえりからも見られたように、「誰か」の歴史ではなく一人ひとりの生の声をもった一人の人間としての人生を通して学ぶことを可能にしたと言える。一人ひとりの「声」に触れることによって彼・彼女たちが「どう生きたか」だけではなく「どのように生きようとしていたのか」という面についても知ることができたのではないかと考える。

また、実在した一人一人の人間の声に向き合うことは、同時に多様な声に向き合うことにもなる。授業後のふりかえりの中では「一人ひとりの人生が異なっていた」のようにライフヒストリーで扱った人の人生が多様であるということへの気づきが多く見られた。またそれは同時に日系人と一括りでは捉えることができないという気づきにもつながっている。

ライフヒストリーを通して学ぶことは、当事者について学ぶことにもつながる。当事者の立場に立つことの重要性は異文化コミュニケーション教育においてもよく指摘がなされ、これまでロールプレイやシミュレーションなどの手法がよくとられてきている。しかし、これらは実在したケースではなく疑似体験である場合が多い。しかし、ライフヒストリーは実在したひとりの人間を題材として扱っている。リアルなライフヒストリーという題材を用いることにより、当事者の声に耳を傾けることで当事者の立場に立つということが可能になると考える。

<2> 認知的なレベルだけではなく感情的なレベルでの学びが可能である

ライフヒストリーは、認知的なレベルでの学びだけではなく、感情的なレベルでの学びも可能にするといえる。ふりかえりからは、「アメリカ人か日本人かどちらの感情でいたら

いかわからない」「心理的葛藤が多くありそう」のように感情面に言及した記述が見られた。

また、授業全体のふりかえりにおいては、当事者への共感に関する記述が多く見られた。ふりかえりの記述では、当事者の苦労や苦悩への共感が多く見られたが、それだけではなく当事者の強さや願いについて言及している記述も見られた。「当事者がどう生きたいのか」という希望や当事者自身の強さについて言及した記述も見られた。共感し当事者から学ぶという姿勢も読み取れる。

今回の授業で扱ったライフヒストリーは「戦争」という時代背景の中で「日系人」という立場の当事者のライフヒストリーを扱ったものである。しかし、学生にとっては戦争という時代背景も日系人という立場も当人とはかけ離れたものである。しかし、実在した人のライフヒストリーを用いたことで、当事者の立場に感情移入し、感情的な面についても共感することができたのではないかと考える。ライフヒストリーにおける感情的なレベルでの学びは、事実を中心に学ぶ歴史の認知的面を中心とした学習では得られない側面の学びであると考えられる。

<3>語られた言葉を通して学ぶことにより、生き方、語り方からその人の人生について学ぶことができる

ライフヒストリーは、「語られた言葉を通して学ぶ」実践である。これは「何が語られたのか」という単に語られた内容から学ぶだけではなく「どのように語られたのか」という「語り方」からも学ぶという方法である。

今回扱ったライフヒストリーの中では、例えば、当事者のSさんが戦争中での出来事について語っている中で「夜は真っ暗にして明かりを消すか窓をきっちり閉めて、ちょっとでもめれるとやかましく言われます」（森茂・中山 2008）と現在形で語っている。このことは、Sさんはこの戦時中の出来事を「過去形」で語っていないということである。Sさんにとってこの出来事を「現在形」で語ることは、過去の忘れた出来事として捉えるのではなく、今なお自身の中で強く印象に残っている出来事として刻み込まれているということがこの語り方からうかがえる。ライフヒストリーはこの語られ方にも注目することによって一人の人間の生き方を学ぶことができるといえる。

しかしながら、ライフヒストリーには「語られた記憶、語られなかった記憶、語ることでできない記憶がある」（森茂・中山 2008）のも事実である。岡（2000）は「出来事の多くは時の経過とともに、そこから語り得なかった言葉では切り取ることでできなかった余剰部分があったことなど、その出来事を体験した当の者さえも忘れ去ってしまっ、言葉で語られたことがすべてであったかのように思うようになるかもしれない」と述べている。

授業のふりかえりからは「日本人のような行動をおさえたり、多くの悩みや疑問も少なからずあったのでは？しかし、私自身の考えでは考えられないような思いが絶対にあると思う。文章だけでは語られない思いが」という記述が見られた。この記述は、当事者には様々な複雑な思いがあり、ライフヒストリーだけでは語られない思いがあったのではない



かという点について言及している。ライフヒストリーを読み解くことで、そこに「語られない思い」についての気づきがあったといえる。ライフヒストリーを通しての学びは「語り方」からの学びだけではなく、当事者の「語られなかった」言葉への気づきという学びも包含しているといえる。

<4>二項対立的なアイデンティティだけではなく、重層的、ハイブリッドなアイデンティティへの気づきを促すことが可能となる

今回の実践では、戦時中の日系人のライフヒストリーを扱った。日系人という重層的なアイデンティティを持つ人びとが、戦争という厳しい状況の中でどのように生きたのかということがテーマとなっている。今回のライフヒストリーの実践のふりかえりからは、二つの国の狭間でのアイデンティティの葛藤やハイブリッドなアイデンティティについての記述が多く見られた。

実践直後のふりかえりからは「自分はいったい何者かという問いに苦しんでいたのではないか」のようにアイデンティティの葛藤や厳しい選択の難しさが記述されていた。また「純粹に「〇〇人」と断定できないあやふやな立ち位置がもたらす影響についても考える必要がある」のようにハイブリッドなアイデンティティに関する記述も見られた。

授業全体のふりかえりの記述では、より客観的にアイデンティティを捉えていた。たとえば「日系人という大きな枠組だけではなく個人というミクロの視点から日系人を見ることで、アメリカと日本という2つの国の間でアイデンティティが揺らぎながらも両国の架け橋になろうとした存在がいたことがわかった」とあるが、これは、ライフヒストリーを用いたことでマクロな視点ばかりではなく個人というミクロな視点で日系人をみることができたこと、そのことによってアイデンティティのゆらぎが見られたこと、これから2つのアイデンティティを活かしてどう生きたいと思っていると考えているのかについて言及している。今回のライフヒストリーを用いた実践ではこのようにアイデンティティの葛藤やハイブリッドなアイデンティティへの気づきを促したといえる。

以上、今回の実践から見いだした4つの点について述べた。今後ますますグローバル化が進んでいくことが予想されるが、多文化教育の中でライフヒストリーを用いた実践は一つの方法として意義があるのではないかと考える。ただ、ライフヒストリーのみで完全に当事者の立場になり得たとは言いきれず、その意味では限界があろう。しかし、ライフヒストリーを用いることで「当事者の立場」に「なろうとした」という点においては意義があったのではないかと考えられる。

**謝辞** 当研究をまとめるにあたり、学会等でコメントをくださった方々に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 法務省ホームページ, 2019, 平成 30 年度末現在における在留外国人数について,  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00081.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html)(2019 年  
9 月 18 日閲覧)
- 森茂岳雄, 中山京子, 2008, 日系移民学習の理論と実践-グローバル教育と多文化教育を  
つなぐ, 明石書店
- 岡真理, 2000, 記憶・物語, 岩波書店
- 総務省, 2006, 多文化共生の推進に関する研究会報告書

(2019 年 9 月 27 日 受付)